

日本スポーツ社会学会会報

Vol. 35

目 次

- 第 12 回大会特集
- 研究委員会からのお知らせ
- 編集委員会からのお知らせ
- ホームページ委員会からのお知らせ
- 旧事務局からのお知らせ
- 新事務局からのお知らせ
- 会員動向
- 編集後記・事務局住所

日本スポーツ社会学会

Japan Society of Sport Sociology

事務局 京都教育大学 2003年6月

「第12回大会特集」

日本スポーツ社会学会第12回大会を終えて

岡山大会実行委員長：大橋美勝（岡山大学）

次期開催校挨拶で、「晴れの国 岡山中、きっと桜の花も楽しめることでしょう」と書きましたが、桜の開花までには至りませんでちょっと残念でした。これは昨年が暖かかったからで、仕方ないことですが、桜ならぬ議論の花を咲かせて下さいまして、心から御礼申し上げます。

例年より1週間早く開催したために、参加出来なかった方々も大勢おられたのではないかと心配しておりますが、受付をされた人が全部で177名で、岡山という地の利のせいなのか、1週間早めたせいなのかわかりませんが、例年以上の多くの方々にご参加を頂き、この上なく嬉しく思っております。

本大会では、一般発表が33演題、特別講演が2つ、課題研究テーマセッションが2つ、公開シンポジウムが1つなされました。特にマグワイヤー氏による特別講演「スポーツ社会学の国際的動向」は通訳なしの英語でなされたために、我々にとりましてはいい刺激になりました。OHPを使いながらかなりゆっくり話してくれましたから、理解できた方々が大勢いただろうと思います。

マンツェンライテル氏による特別講演「日本の都市文化とフットボール」は日本語でなされ、物凄い緊張だったそうです。

公開シンポジウム「心理学化する社会とスポーツ」には、会員外でどれだけの方々にご参加頂いたかわかりませんが、250人入れる会場がいっぱいになるくらい盛況で、3人の演者のとても迫力ある主張に聞き入ってくれまして、大成功だったと思います。

しかし、こういう大会のお世話をするのが初めての者が殆どでしたので、会員の方々には、我々の気が付かないところで多々ご迷惑をおかけしたことがあっただろうと思います。この紙面をお借りしてお詫び申し上げます。

最後に、今回、司会をして下さった方々、パネリストやシンポジストをお引き受け下さった方々、そして裏からこの大会をサポートして下さいました学会事務局の方々に、心から感謝申し上げます。

「特別講演」

Dr. Joseph Maguire, Loughborough University, U.K.

“ International Trend of the Sociology of Sport ”

Maguire 氏の特別講演に参加して

甲斐健人（愛知教育大学）

特別講演では国際的なスポーツ社会学領域の変遷と今後の課題についての展望が語られた。文字情報を用意した上で比較的ゆっくりと語る Maguire 氏の態度に、各論点の詳細な説明よりも広範囲の話題をできるだけ共有しようとする姿勢を感じた。

1920年代以降この領域が制度としてできあがっていく様子や各時代の理論的変遷の紹介等をふまえて、これからの動向として Policy(いかに問題を解決するのか)、Advocacy(誰の立場にたつのか)、Theory(理論的貢献)が求められていくのではないかという見解が示された。

個人的に非常に強い印象を受けたのが、氏が今後のスポーツ社会学が重視すべきキーワードのひとつとして環境問題を指摘したことである。ある日本人研究者から、国際学会でスポーツと環境問題について話題にしても真剣に聞いてくれるのはドイツなど限られた国の研究者で、全体的にはあまり関心は高くない、という話を聞いてから5年も経っていないように記憶している。国際スポーツ社会学会長が個人的見解とはいえ環境を重要なキーワードとして指摘する姿を見ながら、現実の変化や認識の変化などさまざまな事情の中で、学問のあり方は時には急激に変化するものだと感じ、なぜかわくわくしていた。

その他のキーワードとして、Globalization, Body/Health もあがっていた(後半に示されたポイント 例えば、民族文化、ジェンダー、身体の規律化・開放、医学と科学、文化的多様性、文化的経済的格差など はいずれも3つのキーワードに関連しているように思う)。このような氏の考え方を象徴していたのは Human Development という言葉ではないだろうか。この言葉についてはさまざまな捉え方があるのかもしれないが、私は「人々の暮らしをいかに良くしていくのか」といった意味合いではないかと受け止めた。スポーツ社会学領域における一つの研究のあり方として、「スポーツ」に注目しながらさまざまな人々の暮らしを考えていくことが重要なのではないかと感じている。

もちろん氏の主張を鵜呑みにする必要はないだろう。ただし、理論的変遷を語った

後に付け加えた、特定の理論的立場が絶対と考えるのではなく、理論と調査とのすり合わせを重視する必要があるという発言は多くの人が受け入れやすいものではないだろうか。

ここ数年の本学会の状況等も合わせて考えると、氏が指摘した（幅広い分野への）理論的貢献を積み重ねるべき時期にさしかかりつつあると同時に、現実的な成果を求めた様々な試みが始まっているのではないかとも思う。このような流れの中で、決して簡単とは思えないが自分らしい仕事をしていきたいと大いに刺激を受けた講演だった。

「特別講演」

Dr. Wolfram Manzenreiter, University of Vienna, Austria

「サッカーと日本社会のイベント化」

杉本厚夫（京都教育大学）

サッカーと都市文化：今や日本においてサッカーは都市文化にとって欠かせないものとなってきた。鹿島市の成功に端を発して、新潟市においても都市の文化に根付つつある。その都市文化としてのサッカーの定着を、サッカーを観戦することによるパフォーマンスとそのイベント性に注目して今回は考察してみる。

パフォーマンスとしてのスポーツ：教育の倫理と目的に密接な関係で発生したスポーツは、学校の文脈を超えても教育のツールとして見られてきた。しかし、「Jリーグ」が設立されて以来、日本スポーツ文化が変わってきたことはいうまでもない。スタジアムに観衆が集まっても、個人がそれぞれの集団に頼って、自分のパフォーマンスを他者と同調させる習慣が、日本サポーター文化の特徴であると言われるが、そのような解釈の限界は、時々報道されるように、興奮の盛り上がりが行き過ぎた行為につながっていくことにはっきり現れている。そして、2002年のwcにおける日本代表の成績に熱狂した観衆の行動は、感情集団の自動的な自己組織化によるものと推定できる。また、組織の面で野球の応援団に似ていることが少なくないサッカーの応援団は、グローバルな文化資源からファンソング、ウェア、ポーズ、イメージなどを自分の裁量で選び取ったり、地方的記憶や表象と複合したり、自分で創造した文化ハイブリッド的なやり方をしていると言うことができる。

イベントとしてのスポーツ：試合は観衆がいなくても意味があるが、観衆の存在が現代のプロスポーツの存在基盤となっていることから、イベントにおけるスポーツは「見

る」「見せる」という相互作用から構成されている。観衆は競争する選手やチームと対立しながら、試合の進展に共時的な体験をしている。そしてスポーツのイベント性を考えると、美的なスペクタクルと感情集団化という二つの様子が目立つ。前者の美的なスペクタクルという特質は、結果が分からない競争の未決定と身体の儀礼による。後者の感情集団化は衝動的に自己を十分に生かすことや英雄崇拜、そして反射的過剰高揚に現れている。

日本におけるイベントとしてのスポーツ：大衆消費が高度経済成長の動機であったが、日常生活が豊かになってからは、ステータスの演出としての感動体験が消費に代わってきた。後期近代社会は社会的集団性を強く求めているが、これまでのように人々が伝統的な地域社会から求められた義務を負わなくなっている傾向にある。それに代わって、様々な理由から組織された感動を与える一時的なイベント集団が、もっともアーバンライフスタイルにあっているのではなかろうか。だからと言って、現代社会のすべての集団型がイベント性に基いているわけではないが、伝統的価値の失墜が進めば進むほど、社会的模倣としてのイベントも広がっていると思う。

以上のようなパースペクティブから、現在、マンチェンライター氏は日本の都市におけるスポーツ行政に「リーグがどのような役割を果たしているかを調査中であり、また、機会を改めて発表していただきたいと願っている。

Manzenreiter 先生の特別講演に参加して

奥田睦子（金沢大学）

Manzenreiter 先生は「サッカーと日本社会のイベント化」というテーマで、サッカーを観戦するというイベントの経験が都市生活にとってどのような機能を果たしているのかといことと、観戦の行為を含むイベントを経験することが都市生活にとってどのような機能を果たしているのかということについて、日本語で書かれているレジュメにそって流暢な日本語でお話しくございました。外国語に恐怖心を抱く私にとってはとてもありがたいことでした。また、レジュメの文献欄には、この学会の学会員の方の論文が多数掲載されており、それらの中には私自身も触れたことがあったものも含まれていましたので、多少の予備知識をもって講演を聴くことができました。

先生は、結びの部分で、高度経済成長期においては大衆の消費行動がその動機となっていたけれども、日常生活が豊かになった今では、ステータスの演出としての感動

体験が消費に代わってきたと述べられていました。モノの消費に飽きたわれわれは、感動という実体をもたないものを消費することを望む（望まざるをえない）社会を構築し、また、そのような中で生きているのであると解釈しました。また、竹之内氏の論文を引き合いにだしながら、日常生活の「ハレ化」「イベント化」によって、現在の日本の都市生活では、人々は日常生活にもハレにも欲求不満が募るため、より強い刺激や感動を与えてくれる非日常のイベントを求め続けることになることや、社会的集団性を求める社会の中で、組織された一時的なイベント集団が都市で生活する人々の欲求に適したものであるとも述べられていました。自称「野球おたく」であり、サッカーへの興味はほとんどなかった私でしたが、2002年のWorld Cup日韓大会では、世界各国のチームのキャンプ地招致合戦から本大会の決勝戦の結果に至るまで、毎日のようにTV番組や新聞報道にかじりつき、解説者さながらに蘊蓄を語りながらWorld Cupというイベントを楽しみました。この講演を聴いた今、当時の自分の行動を振り返ってみると、サッカーの卓越したプレーそのものを楽しむと同時に、韓国のあのレッドデビルに驚嘆しつつも感心したり、サッカーフーリガンの出現をちょっと期待してみたり（不謹慎ですみません）、得点シーンに鳥肌が立ったり、毎日のようにWorld Cupの話をだれかれとしては皆で盛りあがっていたり...と、にわかサッカーファンとなって、感動体験の消費を楽しんでいたように思います。

今回のManzenreiter先生の講演に参加して、改めてスポーツイベントが都市化した社会的な要請の中で生産され、また、消費されているということ強く感じました。

一つ残念だったことは、時間の関係で質疑応答が行われなかったことです。先生と学会員の方とのやりとりがあれば、それによってもっと理解を深めることができたように思われます。

テーマセッションA

「日韓ワールドカップとメディア

～メディアスポーツとしてのワールドカップ『日韓』共催は何をもたらしたのか～

黒田 勇（関西大学）

セッションでは、「韓国」に焦点を当てて、W杯を通じて、「ナショナルなるもの」がどのように構成され、また変化を見せたのかを中心に議論した。このことは当然、「われわれ」日本にとって「韓国」がどのような存在として現われたのかという議論であるとともに、そのことによって「われわれ」がどのように構成されたのかという議論、またこの共催大会を通じ、これまでの「われわれ」と「彼ら」の関係がどのように変容したのか、また、していく可能性があるのかという議論にもすすむことが期待された。

予定では、まず、韓国サッカーを取材してきた中小路徹（朝日新聞）さんに、韓国のサッカーをどのように捉えたのか、それをどのように報道したのかを中心に、日本のメディアの立場、すなわち「韓国言説」の“作り手”として報告をお願いしていた。ところが、数日前に開始された米英の「イラク侵攻」のため本務を離れることができなくなり、残念ながら、報告をしていただけなかった。

そこで、森津千尋（同志社大大学院）さんが、「メディア・イベントとして街頭応援」というタイトルで、大会時に話題となった韓国のサポーター・レッドデビルの応援とその“熱狂”の「舞台裏」を報告した。森津さんは「街頭応援」という現象が、その準備過程から大会中の盛り上がりの要因を、携帯電話会社によるテレビCMキャンペーンと、大会中のテレビ番組によって主導されたメディア・イベントとしての側面を中心に明らかにした。

さらに、黄盛彬（ファン・ソンビン / 立命館大）さんは、「韓国の自画像の変容」とのタイトルで、韓国のメディアがW杯を通じて、どのように韓国というナショナルを描いたのかを報告した。ファンさんによれば、韓国のメディアにおいて、韓国というナショナルの表象は可変的、重層的に構成され、日本を他者としてのみ構成されるのではなく、米国・中国・北朝鮮との関係でも構成されるとする。さらにW杯を契機に顕在化した自らの国家、社会の捉え直しの言説は大統領選挙にも引き継がれ、これ

までとは異なる「本当のナショナリズム」台頭の可能性も展望した。

最後に、大会期間中も日本に滞在しながら日本の“熱狂”を取材し、韓国に向けて報道した“日本言説”の作り手として、金忠植（東亜日報東京支社長）さんが「W杯報道と日韓関係の行方」と題して報告した。金さんは、開催準備期間を通じて、「共催」を成功させようとする両国の機運が、多くの政治的な問題を乗り越えて、大衆的なレベルでの交流を増やし、両国間の意識の「壁」を乗り越える契機となったと評価した。

各報告後のフロアを交えての討論でも、大会後半にインターネットを中心に生まれた「嫌韓」言説の意味を問う議論や、韓国の躍進に対し、日本のメディアに、いわば「ポストコロニアル・メランコリア」的な言説があったのではといった議論が出された。また、企業とメディアが仕掛けた「応援」に対し、その経済的効果や、また「動員」された人々の側の要因についての疑問も出された。

全体として韓国にとってのW杯を捉えた議論を中心として開始されたものの、当然のことながら、日本のメディアが生み出した「韓国」言説を相対化しつつ、W杯を通じ顕在化した「われわれ=日本」という言説を再検討する活発な議論となったと総括したい。

「日韓ワールドカップとメディア」に出席して

海老島均（びわこ成蹊スポーツ大学）

ワールドカップの記憶を鮮明に呼び起こすような熱を帯びたセッションであった。イラク情勢の影響で朝日新聞の中小路徹氏の欠席と言う残念な要素もあったが、3人のパネリストの素晴らしいプレゼンテーションと黒田先生の軽妙な司会は会場をほぼ埋め尽くした聴衆を半年前の一大イベントへとタイムスリップさせた。

セッションは、韓国サイドにおいて「ナショナル」なものが、メディアを通していかに形成されていったかについてが焦点となり展開された。

一番手の森津（同志社大学大学院）さんは、SKテレコム（韓国の携帯電話会社）のテレビCMが、あの熱狂的な韓国のサポーターの統制のとれた応援方法を演出した張本人であったことを映像を交えて非常に分かりやすく説明してくれた。熱狂的な街頭応援、それを熱心に取り上げたメディアの相乗効果により、様々なレベルで生じたナショナル・チーム・サポート運動が国民的なイベントに昇華するメカニズムについ

て考察した。この国民的「熱気」がその後の反米運動、ノサモ運動へと続いて行ったのではないかと仮説で締めくくった。

次に立命館大学の黄先生は、日韓両国のナショナリズムに関して自画像ということ 키워ワードに、メディア分析を用いて鋭く検証した。韓国の自画像の変化や複雑性について、歴史的な観点、ワールドカップというイベントを通しての微妙な変化に焦点をあてて論議した。韓国の自画像が、対日本を中心とした他者認識や世代間の相違などによりさまざまなせめぎ合いを経験していることを分析検証した。一方、日本側マス・メディアの韓国の盛り上がり「ナショナリズムの発揚」として捕らえる一元的な解釈、日本人のステレオタイプな韓国イメージの形成に於ける考察を示した。また、ワールドカップを通して、韓国民の中の小グループ(高校の同級生の集まり等)がインターネットや携帯を介して凝集力を増し、それが最盛期では80万人集まったと言われる街頭応援という一種の社会現象にいたるプロセスを紹介した。ワールドカップは、ネット型社会が国民の社会行動をコントロールする力を強化するきっかけになったのではないかと提言をした。

最後に東亜日報東京支局長の金氏は、大会期間中の韓国と日本の報道の相違点、またメディア同士の交流と言った部分に焦点をあてて多くの体験談を交えて話した。日本が敗退してから韓国を応援するメッセージを日本のメディア関係の人から多くもらった等の裏話も披露してくれた。

タレントの交流など、若者文化の部分では共有する部分も大きいことを考えると、日韓共催は両国の民間レベルの交流に非常に貢献したのではないかと締めくくった。

最後にフロアーの参加者も交え白熱した議論が展開された。午前中の一般発表の際にも議論された、この韓国の街頭運動がその後反米運動やノサモ運動へとつながるプロセスを国民的な「祭り」として定義できるのかどうかについてのやりとりは興味深かったが、時間の関係から結論に至るまでにはいかなかった。このセッションは、日韓共催が市民レベルでお互いのナショナリズム、また自国のナショナリズムを認識する際に新たな局面を与えてくれたこと、そしてその根底にある歴史的背景、社会的条件によって作られたであろう自分たちの潜在意識を、メディアとの連関の中で見つめなおす良い機会を与えてくれた。

テーマセッション B

「身体をどう捉えるか 心（メタフィジック）の身体論 vs 肉（フィジック）の身体論」

松田恵示（岡山大学）

本セッションは、「スポーツする身体社会学」をテーマにした、2年間の課題研究のまとめの報告でした。スポーツ社会学会が発足後、特に研究視点や理論的課題として、「身体」というテーマには継続的に高い関心が払われてきました。そこで、今回の課題研究においては、これまでの成果を踏まえつつ、スポーツ社会学独自のアプローチの可能性をさらに探ろうとしました。そこで、用意されたのが、「心の身体論」と「肉の身体論」という対抗概念です。

積み重ねられてきた研究を検討する中で、これまでのスポーツ社会学における「身体」の取扱い方には、大きなひとつの傾向がある、とプロジェクトでは考えました。それは単なる肉体という意味での身体以上の存在として、「身体」を捉えるという構えです。「スポーツする身体社会学」において、このことは1つの可能性なのか、あるいは1つの限界なのか。プロジェクトでは意見が分かれました。そこで、この論点をはっきり示すところまでを、課題研究のまとめとして整理することになりました。その結果報告されたのが、今回の「身体をどう捉えるか - 心（メタフィジック）の身体論 vs 肉（フィジック）の身体論 - 」というテーマセッションと、研究誌でまとめられた論考です。

セッションでは、まず問題を明示するために、マラドーナと大山倍達の映像を見た後、心の身体論の立場から、日下氏が市川、湯浅、大澤といった代表的な身体論者の諸論をまとめたのちに「内側からのスポーツ身体論」の可能性について報告されました。そして野崎氏は、膨大なこれまでの「スポーツする身体」の社会的な議論を鳥瞰したうえで、「身体化されたスタティックな構造を問う」「身体化された構造の超克（生成）を現象の内側から問う」「<スポーツする身体>それ自体の神秘性から出発して諸現象の意味を問う」という3つの可能性について報告されました。一方、肉の身体論の立場から、挾本氏が、生物学的あるいは人類学的な観点をこれまでの身体論が欠落させており、そしてそれは社会科学全体が陥っている1つの問題状況でもあること。まただからこそ、心の身体論が一種の「妄想主義」に向いかねない、根本

的な難点を持っていること。さらに池井氏からは、「風変わりな動物」という種としての人間の持つ自然性をベースラインとする、ゲーレン社会学から見た身体論の論点が、切れ味鋭い図式を利用して報告されました。

その後、フロアーのみなさんを含めた議論になり、身体の「型」をめぐる問題や、社会学と自然科学の関係、また経験と社会学的思考の範囲の問題、身体へのまなざしが社会学を上下2方向に超える性格について、など大変興味深い論点が活発に交わされました。今回のセッションが発火点となって、「スポーツ社会学発」の身体へのまなざしが、より深いものになっていくことになれば幸いです。最後に、活発な議論を展開して下さい、プロジェクトメンバーのみなさん、ならびに会場のみなさんに、心よりお礼を申し上げます。

「身体をどう捉えるか 心（メタフィジック）の身体論 vs 肉（フィジック）の身体論」に参加して

谷口雅子（奈良女子大学大学院）

ここでは、「身体をどうとらえるか」というテーマに基づいて、「心（メタフィジック）の身体論」vs「肉（フィジック）の身体論」という形式で、4人のパネリストの発表とそれに対する質疑応答がなされました。最近、最も重要なテーマの1つとなっている「スポーツと身体」の問題について、新たなパースペクティブを投げ入れる試みということで、発表自体も用意された資料も密度の濃いもので、頭を整理しながら内容に聞き入っている間に、あっという間に時間が過ぎてしまいました。日下先生、野崎先生が発表された「心（メタフィジック）の身体論」では、市川浩やメルロ＝ポンティの身体に関する言説を手がかりとしながら、能動的でありながら同時に受動的である身体、また、意識や思考に先立って環境・世界との融合関係を生じさせてしまう身体に注目することの重要性が論じられました。これに対して、池井先生、挾本先生が発表された「肉（フィジック）の身体論」では、これまでの身体論が「動物としての人間の側面に注目してこなかった」（池井先生）ことを批判し、「人間を生物学的および人類学的観点から考察する必要性」（挾本先生）が述べられました。「動物としての人間」に注目した場合、本能によって行動する動物に対して、人間は徹底的に「脱特殊化」「脱専門化」した肉体として捉えられます。アスリートたちの卓越した能力は、非連続な脱専門家しているわれわれの肉体を、連続化し特殊化すること

によって可能となり、そこには、運動そのものが目的となった肉体、活動の目的よりも肉体そのものに熱中する感覚が存在します。したがって、スポーツの醍醐味として語られる、至高性の感覚や溶解の体験や祝祭的感情も、この「動物としての人間」に注目することによって導き出される、肉体自身が目的になる性質から生じるものとして捉えることが可能となることが論じられました。ここにおいて、精神としての身体（市川浩）から出発した「心（メタフィジック）の身体論」と、動物としての人間から出発した「肉（フィジック）の身体論」との融合する地点（＝身体論の出発点となる「肉体」のありよう）が、垣間見られたような気がしました。この2時間のセッションの中には、まだまだ私が把握しきれていないような、身体についての重要な示唆がいっぱい詰まっていたように思います。いただいた資料を、今後の思考のヒントにさせていただきたいと考えています。

公開シンポジウム

「心理学化する社会とスポーツ」

演 者：

大村 英昭（関西学院大学）

香山 リカ（神戸芸術工科大学）

山之内 靖（フェリス女学院大学）

司 会&コメンテーター：

菊 幸一（奈良女子大学）

河原 和枝（京都橘女子大学）

加野 芳正（香川大学）

菊 幸一（筑波大学）

「心理学化する社会」をどのようにとらえ、これと「スポーツ」をどのように結びつけて主題化したり、テーマ化したりできるのか。今回の公開シンポジウムは、スポーツ社会学の今後の課題や方向性を見通す上で、すなわちスポーツ社会学という「知」

の社会的存在を問う上で非常に重要な話題を提供するとともに、これを「公開」するという形式の中で、より開かれた主題としてスポーツ社会学が何をなすべきかを問う契機を与えるものであった。その意味で、3人の演者の発表内容と学会員によるコメントおよびそのやり取りは、3人の演者がスポーツ社会学をフィールドとしない立場で、しかも異なった学問的背景を持っているだけに非常に興味深い論点を提示してくれていたように思われる。

大村氏は宗教社会学的観点から宗教とスポーツとの関係を従来から言われているような「煽る文化」としてその共通性をみるのではなく、むしろ「鎮める文化」として潜在的に機能する点にみようとする。この一見対立的な2つの機能は、煽ることによって鎮められるという逆説的な様相を呈している。スポーツは競争の結果として参加者や見る者に「分限」(絶対になかない)という思いを植えつけ、かえってそのことが心地よくなるような状況を作り出す。そのことによって、社会的空間における自分たちの位置や場所、すなわち距離感を明確にすることができ、スポーツの重要性は宗教同様に高まっていくとの見通しが述べられた。これに対し香山氏は、今日のスポーツヒーローは人々の中での「自我理想」と「鏡像としての自我」との距離感の喪失からむしろ「身近な存在」として受け入れられており、「とりあえず」の手がかりとして消費される対象になっていると指摘する。つまり、ここでは自己アイデンティティの喪失という病理に陥る一歩手前で、距離感の喪失に利用される対象としてスポーツヒーローが存在し、これが早晩、プライバシーの侵害やタレント化されたスポーツヒーロー像への過剰な欲望を引き起こすというのである。このような大村、香山両氏の、いわば社会空間におけるスポーツを対象とした心理的距離のとらえ方の相違は、両氏によるアカデミック・パラダイムの相違とその相対化という観点から、スポーツ社会学がこれをどのように受けとめるのかという課題を示唆しているようで非常に興味深い。

このように両氏の議論が、主に社会空間における心理的状況とスポーツとの関係に焦点化されたのに対して、歴史社会学を専門とする山之内氏は心理学化する社会を現代社会における「再魔術化」との関係、およびそのような視点を提示し得る社会学の「知」の歴史の変遷それ自体を問題提起する。いわば長い歴史的な時間軸から「知」の言説を相対化する中で、現代社会がまさにM・ウェーバーが唱えた「脱」魔術化の果てに「再」魔術化する様相を呈しており(もっともウェーバー自身はすでにそれを見抜いていたと山之内氏は指摘する)、それが心理学という「知」の言説をまとめて細密化、巧妙化しながら社会の需要を喚起している。しかし、これと対峙すべき社会科

学は全般的に衰退化しており、この分野の衰退化がさらに心のケア＝対応をキーワードとする心理学化する社会に拍車をかけ、新たな階級社会の出現に結びつこうとしている。ここでは、先の2人の演者が問題にした「距離感」が「場所感覚の喪失（no sense of place）」の問題として取り上げられ、これまでの資本の所有に代わる文化や情報といった知の所有が新たな階級を生み出す源泉になっていくと指摘する。これとの関係で言えば、スポーツは情報化社会の中で一見階級を問わず誰にとってもおもしろい対象であるがゆえに共有化されているように見えるが、むしろだからこそ差別化を進行させる源泉にもなりえるという逆説が存在する（例えばグローバル社会における gated community の出現）。山之内氏はこのような文脈から、スポーツ社会学には社会学が未だ成しえていない現代社会の新たな構造変動を先端的に切り開いていく期待があると述べる。

コメンテーターの河原氏からは、大村、香山両氏の議論に関して現代社会が道德劇（モラリティ・ドラマ）からサイコ・ドラマへ移行している文脈で読み取れることが指摘されるとともに、ジェンダーや消費社会論との関係でスポーツヒーローや心理学化する社会をどのようにとらえることができるのかといった質問がなされた。また、同じく加野氏からは、スポーツと宗教の異同といった観点からなぜスポーツが宗教に代わりえたのか（対大村氏）、心理学的な言説の社会的影響をどのように考えるのか（対香山氏）、歴史社会学的な観点とスポーツそれ自体との関係をどのように考えるのか（対山之内氏）、などの質問が出された。前段の3人の演者による議論のまとめは、この2人のコメンテーターによる適切なコメントや質問による議論の展開によるところが大きいことは言うまでもない。

フロアーからは、関西学院大学の宮原氏が再魔術化と心理学化する社会との関係を問う次元よりも、心理学化する社会がむしろ人々を純粹主観化し、アトム化を進行させていくがゆえに新たな「脱」魔術化の出現が予測されるのではないかとの貴重な指摘があった。また、甲南女子大学の井上氏（前スポーツ社会学会会長）からは、山之内氏の指摘に絡んで今後「スポーツと場所」といったテーマでこの企画を継続的に議論していく必要性が述べられた。

以上のような本公開シンポジウムにおける議論は、結局のところ社会が心理学という知の言説を受容し、需要していく中で、そのような言説が持つ権力性の問題をどのようにとらえ、評価し、スポーツがこれとどのようにかわり、またかわらされようとしているのかを明らかにする必要性を鋭く指摘してくれたように思われる。前会長の井上氏の指摘にもあるように、本公開シンポジウムを経て今後さらに現代の社会

状況におけるスポーツ社会学の可能性を探る議論を継続していく必要がある。

公開シンポジウム「心理学化する社会とスポーツ」に参加して

坂 なつこ（一橋大学）

今回の公開シンポジウムは『心理学化する社会とスポーツ』という、タイトルでおこなわれた。シンポジストには、臨床社会学の大村英昭氏、精神病理学の香山リカ氏、そして歴史社会学の山之内靖氏を迎えており、各々の専門分野で著名な3氏が、スポーツについてそのような議論をされるのか、そしてまた「心理学化」とはどのようなことなのか、大きな期待を抱かせるものであった。

まずは、自身も宗教関係者であるという立場から、大村氏により「宗教とスポーツ」について、コメントがなされた。大村氏は、スポーツをかつての宗教になぞらえて、ヒーリング、癒しなど「鎮めの機能」があると語る。例にあげた阪神タイガースファンや、2002年サッカーW杯のまさに「集合沸騰」的な熱狂を経験した私たちには、全く逆のように感じるのだが、スポーツの言説には「なだめ役」としての「クーラー」機能があるとするのである。能力の格差（不平等）を前提とし、その限界を合理的にしらされるスポーツという領域を受容することで、アノミーに陥りがちな現代社会において、かつての制度化された「クーラー」である宗教と同じような機能をスポーツは持っているとしている。スポーツにおいては「階級分化」が肯定的に働き、「尊敬能力」を形成するということから現実社会のモデル足り得るとする。しかし、このようなある種の「秩序維持」的な機能をスポーツに求めることは、硬直した機能主義的スポーツ論に陥る危険性もまた感じられた。

香山氏は、「ヒーローとスポーツ」というテーマで、スポーツヒーローが生み出す心理的効果についてのコメントであった。今回のテーマが語るように、スポーツという身体鍛錬において心理学が活用されていくのは近代化の過程でもあるのだが、他方で「見る側」の心理的側面にも、スポーツはインパクトを与えているとする。香山氏は、「見る側」にとってスポーツヒーローがかつての「手の届かない存在」から、「人間的な存在」へと変化してきていると指摘する。それはメディアによってつくられた像でもあるのだが、スポーツ選手が、サッカーの中田選手のように身近事情等を自らの言葉で語ることは、観客に彼らを「身近な理想」へとシフトさせることができるのである。そのようなスポーツ選手を追う過程で、観客は自我同一性を獲得していくの

だが、実際には「卓越」した存在であるスポーツ選手とそうなれない自分とのギャップの間では、他者や自己への攻撃など様々な病理現象も生じやすくなっていると指摘している。しかしスポーツは趣味が細分化された現代社会において、共通の話題になりえる稀な分野であり、それによって心理学的な境界現象について語る場としても重要であるという指摘は、スポーツに限らず現代社会における暴力の問題を捉える際にも示唆的といえる報告であった。

山之内氏も、同様に、スポーツが「卓越性」を前提としながらも、それが現実の階級（階層）を越えて出でるものであることを、ウェーバーにならい「再魔術化」をキーワードによりマクロな視点から語られた。山之内氏は、70年代の「大学紛争」時代の経験（これについての井上元学会長のコメントは興味深かった）と自身のウェーバー研究の転換点から哲学にまで及ぶ、近代社会の形成と知の再生について語る中で、スポーツという文化そのものが消費手段（商品）となる過程を指摘された。他方で「ベッカム現象」を例に挙げ、商品としてのスポーツを、階層を問わず消費していくことが「再魔術化」の一面であるとする一方で、「symbolic analyst」の支配する「gated society」としての現代社会を切り開いていく可能性をもつものであるとする。その点において、どのようにスポーツが新たな知の生産・再生産に関わっていくのかという点が重要であるのだが、これらについては時間の制約もあり、十分な展開が見られなかったのは残念であった。

全体として、コメンテーターの3氏やフロアからも、多くの興味深い論点が指摘されながら（ジェンダー、高度産業社会などとの関わりなど）、「心理学化」と「スポーツ」について総括的な議論には手が届かなかったという印象がある。しかし、残された課題は、井上元学会長が提案した「場所とスポーツ」（山之内氏）シンポジウムの実現とそこでの議論に引き継がれることを期待しつつ、今後ともこのような「異種混合」の場がますますスポーツ社会学の分野をも発展させていくことを予感させるシンポジウムであったように思う。

一般発表 1 - A 座長：海老原修（横浜国立大学）

企業とスポーツの関わり方に関する一考察

門間由記子（東北大学大学院）

五十嵐慎哉（特定非営利活動法

奈良・東大寺の境内に東大寺学園幼稚園があり、東京浅草・浅草寺にも浅草寺幼稚園がある。お寺に幼稚園ありの組み合わせは何を意味するのであろうか。宗教法人と学校法人、宗教法人と社会福祉の隣接は、同一人物にふたつの法人格を認めない不文律のウラワザ、寄付金控除を手がかりとする同族経営や keiretsu の批判を立体化する。ところで、1998年特定非営利活動促進法が制定されて以来、NPO 法人を中心とした市民活動が活発に動き始め、スポーツの分野も例外でなくなった。一方で手弁当のボランティアに支給される交通費の源泉徴収に関する論議を代表に優遇税制措置の進展がはかれるが、他方では利潤追求を旨とする企業が社会福祉関連 NPO 法人設立に進出するカラクリの疑義が問われる。このような事例をスポーツに求めるとき、本研究はホットな話題を提供してくれた。スポーツ NPO、企業、地域住民の3者の協働は、前2者の密接な関係を脱することができず、企業スポーツ資源が市民スポーツに円滑に消化されない現状が報告された。企業スポーツの資産が重要な社会資本であるとの認識を関係3者が共有することこそ、企業スポーツを基盤とする市民スポーツの発展への手がかりとなる示唆的な発表であり、市民スポーツの財政的な成立要件としてスポーツ NPO の論議が深化する契機となりうる発表であった。

スポーツ少年団の結成過程と変容についての研究

安倍大輔（一橋大学大学院）

少子化による生徒数の減少、生徒のスポーツにたいする価値観の多様化、顧問教諭の高齢化と実技指導力の問題など、子どもとスポーツをめぐる問題が顕在化してきた。このような状況下、スポーツ少年団のあり方を遡及的に問い直す本研究の姿勢は傾聴に値する。スポーツ少年団の小史のなかで、原初的に掲げられる理念「健全育成」「体力づくり」は今日でも青少年を主体とする地域のスポーツクラブや総合型地域スポーツクラブにも称揚される。したがって、スポーツの本質的な現象「なにがおこるかわからない」を引き起こす可能性をおおいに秘める優勝劣敗は捨象される。一種目でなく多種目を志向すること、交流に重きをおき競技性を排除すること、となった。とりわけ、スポーツ少年団が小学生にスポーツの場を提供する重要な機関であるにもかかわらず

わらず、中学生になると激減する今日の実態をいかに説明すればいいのであろうか。中学校の運動部が1種目の競技スポーツを志向する実態にスポーツ少年団のあり方が問われる。全国的な動向に注視しながらも、フロアからの意見、地域的な小史への言及を平行することが、今後のスポーツ少年団のあり方を考える方法となるのかもしれない。

福岡市主婦卓球愛好会からみた地域スポーツ集団形成の分析

伊藤恵造・森川貞夫（日本体育大学）

1995年全国6地域をモデルに指定して始まった「総合型地域スポーツクラブ」は2000年9月「スポーツ振興計画」における「2010年までに、全国の各市町村において少なくとも1つは総合型地域スポーツクラブを育成する」の文言に収斂する。企業スポーツが総合型地域スポーツクラブを受け入れる、民間フィットネスクラブが総合型地域スポーツクラブを支援する、学校運動部の代替として総合型地域スポーツクラブを育成するなど、いくつかの試行が現実化している。しかし、一方では「現状になにひとつ不満がないのになぜ総合型地域スポーツクラブに移行しなければならないのぉ」という家庭婦人バレーボール部員の肉声にたいして満足な回答を準備できない。全国的な動向がまとめられても、その動きに一致するスポーツクラブが皆無となるのは、統計のマジックというより、フィールドワークの欠如と机上の空論の連携に他ならない。本研究は福岡市主婦卓球愛好会を事例とするフィールドワークとなる。とりわけ、配布資料にあらわれる2人の指導者の個人史は地域スポーツの研究視座を提示して興味深い。しかし、そのような人物が占める地域スポーツの位置取りが海老原治善の生涯学習モデルのなかに矮小化される点は残念である。スポーツは衣・食・住といった基本的な欲求と双璧をなすという新たなモデルが思考される時期にあるように思える。

一般発表 1 - B 座長：森川貞夫（日本体育大学）

「近代都市の空間的編成と身体管理に関する研究 日本の明治期における日比谷公園の誕生を手がかりに

小坂美保（奈良女子大学大学院）

演者はすでに「身体の近代化」という視点から「公園」研究を重ねており、今回のテーマもこれまでの研究を基礎にして「身体管理」から分析をくわえようというものである。しかしその「まなざし」は垂直的な監視という支配 - 被支配という関係ではなく、むしろ公園に集まる人々同士の「相互監視」という、一見「水平的」な関係の中に見られる近代社会の、とくに都市における関係性についてであった。演者にとっての都市公園は「擬制としての自然」空間であり、同時に「自由性の存在する」ものとしてとらえられるが、しかしそれは「公園の運動場や運動器械は、それを使う人の身体動作や能力を他者の視線にさらさざるをえず」、したがって「他者の視線というものを意識しておかなければならない」空間となるという。問題はその後である。こうした空間が「都市における秩序の形成過程において、近代的公園は、可視的な他者が集うことによって、その内部にいる人びと同士の間を通じた共通性を構成する重要な要素であるといえよう」という結論が結果として近代都市公園の何をどのような社会的文脈の中で解析していくことになるのだろうか、次なる研究のさらなる発展を期待したい発表であったように私には思えた。

「学校体育におけるカイヨワの再考」

藤澤貴孝（倉敷市立児島第一高校）

演者は先ずこれまでの学校体育におけるプレイ論、とりわけカイヨワのプレイ論の導入は、主としてプレイの分類論（アゴン、アレア、ミミクリ、イリンクス）、中でもアゴン（競争）としてのスポーツやミミクリ（模倣）に教育的価値を見だし、それらを重視してきたが、アレア（運）やイリンクス（眩暈）については重視されてこなかったと指摘する。したがって演者の研究はカイヨワ自身のプレイ論にある「教育的意義づけ」がアゴンとミミクリ、アレアとイリンクスの「結びつき」を切断しない

で近代公教育との関係を論じることに視点を向ける。それは制度疲労した近代公教育を乗り越えるための一つの処方箋として遊びにおける「偶然性」に目を向ける。こうした視点は同時に学校体育での能力主義を貫徹させたアゴンとしての勝敗よりもトレーニングや勝つための練習といった努力の後の勝敗は「運に任せる」しかないという意味での「偶然性に敬意を払う態度」が今後の教育においても必要になるのではないかという主張である。今後は現在の学習指導要領の基調となっている「楽しい体育」論への新たなアプローチ（それは批判的にならざるを得ないと思われるが）であり、その理論的根拠と思われるプレイ論を演者がどのように批判的に見直していくのか、重要な視点として実践との関係もふくめて深まっていくことが期待される。

「戦前期学生野球における教育イデオロギー」

白石義郎（福島大学）

演者の「問題意識」は「教育のロジックとスポーツのロジックは同じものではない」とすれば、それは日本社会で両者の「葛藤とあつれき」にもかかわらず「スポーツが今日の隆盛を極めることができたか」「学校という苗床を失って今日のスポーツが在りえたか」は疑問だということから出発している。このような問題意識を解く鍵として飛田穂洲の「精神野球」論を取り上げている。彼の「精神野球」の言説を「自力救済と自己鍛錬」ととらえる演者は以下にこの「精神野球」言説形成のプロセスと重要な他者をいくつかの史実から分析する。とくに重要な他者以上ものとして草創期の早稲田大学野球部長であった安部磯雄を挙げる。彼の野球精神こそが戦前期学生野球の教育イデオロギーとして機能した「精神野球」論だという。その論拠は主として当時の学生野球を論じたいくつかの論文によっている。その一つに穂洲自身の「安部磯雄の野球精神は武士道ではない。フェアプレイであり、ジェントルマン思想である」という主張を挙げているが、同じ安部磯雄に接した人であってもその受け取り方がちがうこともあるという。例えば「武士道」と関連づけた理解に対しては演者はそれはテキストの「誤読」だとかんたんに断じている。この辺りに私個人は物足りなさを感じたが、それは発表全体がやや図式的にすぎないかという印象もふくんでおり、今後の学会大会における発表時間・質問時間等の延長という課題を提出することになったのは演者には申し訳ないことであった。

一般発表 1 - C 座長：東元春夫（京都女子大学）

「メディア・イベントとしての 2002 FIFA ワールドカップ」

中村 綾（立命館大学大学院）

これは日韓両国のマスメディアにおけるワールドカップ（以下「W杯」と略す）報道を日韓比較の視点から分析・考察することを目的として行った黄盛彬氏との共同研究プロジェクトの中間報告の一部である。日本国内の主要メディアのW杯報道の概要を、大会期間中のテレビ、新聞の質的内容分析により紹介したものである。テレビについては試合中継を、地上波、BS デジタル、およびCS（スカイパーフェクトTV）について概括し、地上波テレビの番組編成を比較、さらに『ザ・ワイド』を事例にワイドショーの内容を分析している。新聞については、『朝日』『読売』『毎日』『産経』の4大紙を、社説、W杯関連特集、および読者投稿欄について分析し、それぞれの特徴を比較した。プロジェクト全体の完結が待たれるが、この報告によりメディア・イベント研究がメディア研究のみならず現代文化研究全体にとっても重要な領域であることが示唆された。

「2002年ワールドカップ共催と韓国社会」

金 恵子（奈良女子大学）

これはW杯開催中の5月30日から1ヶ月間の『東亜日報』を中心とした内容分析に基づく報告であるが、特に韓国代表チームの応援団であるに「赤い悪魔」の「街頭応援」に絞った研究である。報告は、参加各国の応援風景を映像で示した上で、「赤い悪魔」が今回のW杯で韓国に街頭応援という「新しい文化」を作り上げたことを、IT、地域、シンボル、世代という4つの要素から分析する。ITという点では、W杯により1万人から12万人に急増した「赤い悪魔」の会員がインターネットにより組織されていることが特筆に価する。最終的には全国的に広がった今回の応援スタイルではあるが、江北にあるガンファムンが応援のメッカ的存在であったという点で「地域」が第2の要素である。この地域が歴史的に韓国の民主化運動が行われてきた象徴的な場所という意味では第3の要素である「シンボル」と大きく関わる。もっとも今回の

最大のシンボルは従来拒否感が強かった「赤」という色と、神聖なものとされていた「太極旗」がファッション化したことであるが、1ヶ月間幻聴のように続いた「ちゃちゃちゃ・・・」等の応援音声もまたシンボルである。最後に「世代」では、伝統的な韓国社会においてインターネットを媒介にして「若者」が年長者をも巻き込んでいったという点で画期的であった。今回の報告では街頭応援という「新しい文化」について、これら4つの要素を「非日常」という意味での「祭り」の概念を援用して整理するという方向が示された。

「スポーツ・ルールのなかにはない相互性について」

小野寺直樹（横浜国立大学大学院）

この報告は、国家および地域のレベルで存在する「スポーツ空間」における自己決定を「政治システム」という観点から考察した理論研究である。豊富な先行研究を踏まえた上で、スポーツの場における自由と秩序の関連性について、さらに法律と憲法の相違について論考を試みた。結論として報告者は、憲法と法律の相互性が、スポーツ空間にも構築されるならば、「もしスポーツが、＜共同体（コムニタス）というものを表現する、あり得べき機会を提供するものであるならば、部族スポーツと同様、近代スポーツに人類という共同体を実現させようではないか」（グッドマン、1997）という提言を一步進める成果となるのではないかと述べている。

一般発表 2 - A 座長：堺 賢治（愛媛大学）

「学校週 5 日制完全実施後のスポーツ活動に関する研究 その 1 」

島田佳奈（日本体育大学）他 6 名

「学校週 5 日制完全実施後のスポーツ活動に関する研究 その 2 」

北野英人（日本体育大学）他 6 名

島田氏の発表は、中学校運動部活動顧問教師を対象に「学校週 5 日制完全実施後のスポーツ活動」についてアンケート調査を行い、学校週 5 日制完全実施後のスポーツ部活動顧問教師の負担とその負担要因を明らかにしようとしたものである。その結果、顧問教師の負担は増加し、休日部活動指導の負担が増加したことを明らかにした。また、スポーツ部活動指導の負担は増加している顧問教師はそう思っていない顧問教師よりも、練習試合や土曜日の部活動が増加したことや以前よりも休日の出勤が増加したことをあげている。さらに、休日のスポーツ部活動の負担が増加している顧問教師はそう思っていない顧問教師よりも、複数校合同部活動や外部指導者の導入を希望している。

そして、今後は、これらのことを解決するために、学校・地域・家庭が相互に連携し、外部指導者の導入や総合型地域スポーツクラブの充実を図りながら、学校でのスポーツ部活動形態を考慮し、教員の負担を緩和すること、および子どものスポーツをする場を保障していくことを提案している。

北野氏の発表は、同じ調査であり、学校 5 日制完全実施後の部活動形態について、部活動の指導を顧問教師中心で行うことが望ましいと考えている顧問教師（学校継続型）と外部指導者が望ましいと考えている顧問教師（地域移行型）の相違を調べたものである。その結果、学校継続型は現在の部活動に満足しており、教師もある程度部活動に熱心で活動的であるのに対し、地域移行型では、部活動に満足しておらず、今後の活動形態においても外部指導者やシーズン制の導入に肯定的であることを明らかにした。

また、外部指導者の導入・導入希望の顧問教師と非導入の顧問教師の相違を調査した結果、導入・非導入希望の顧問教師の方が外部指導者の導入、複数合同部活動への希望、部活動地域移行への希望、どれをとっても高い数値を示している。加えて、非

導入の顧問教師でも約半数の人が、今後の部活動のあり方で地域移行を希望しており、新しい部活動のあり方を提案している。

両者の調査は、属性分析をしていないことやサンプリング数の少なさによるカイニ乗検定の妥当性に問題点がみられるが、現在、学校現場に起こっている問題を明確にし、解決策を提案しようとする姿勢は高く評価でき、今後の研究の発展が期待される。

一般発表 2 - B 座長：伊藤公雄（大阪大学）

「ライフスタイルとしてのスポーツ サーフィンを事例として」

水野英莉（京都大学）

「『女子マネージャー』という物語の誕生」

高井昌史（関西大学）

水野報告は、国内外におけるサーファーたちとの行動を通じた参与観察や、インターネットサイトからの情報収集などに基づき、サーファーたちのライフスタイルを、「ノマド的な移動」の問題などポストモダン社会のアイデンティティとからめて論じたものである。また、高井報告は、1960年代の日本のスポーツシーンにおける「女子マネージャー」の登場と、1970年代以後のテレビドラマやマンガの世界での彼女たちの描かれ方をめぐって、「男集団」というホモソーシャルな集団と女性とのかわりをジェンダーの視点から考察したものである。

ともに、興味深いテーマであり、第一報告者の水野会員からは、高井会員の報告に、「サーファーの世界での紅一点」といった問題提起がなされるなど、ふたつの報告をクロスさせつつ、フロアも交えた活発な議論が行われた。

一般発表 2 - C 座長：市毛 哲夫（東北大学）

「選択制という神話 スポーツと自己決定」

大達 雄（岡山大学大学院）

本報告は学校体育における選択制カリキュラムについて社会学的な観点から再検討することを画企したものである。報告者は選択制導入の背景および理念として、(1) 生涯学習・たのしい体育・運動特性論への関心、(2) 個人差への対応、(3) 自発性・内発的な動機付け、(4) 個性の増大、(5) スポーツにおける自己決定（学習）能力の育成があったとしている。また、その背後仮説として第一に「選択肢の配置」によって動機づけられ、主体的に振る舞え、個性を伸長させることができるという考え方があり、第二には自己決定能力、理性的・計画的判断が「豊かなスポーツライフ」を保障するという前提があるとしている。報告者はこの前提に疑問を持ち次のように検討をしている。すなわち、スポーツ選択の際、「選択肢を理性的・計画的に選択すること」は「百貨店でサンプル中からネクタイを選ぶこと」と同義であり「真にコミットしうるもの、熱烈な欲望の対象となるもの」の選択としては不適切であり、「人のスポーツを豊かさに動機づける」とはみなされない、とした。しかし、このことは体育カリキュラムの選択制が不必要であるということではなく、「それを欲望すべきだ」と介入する他者（性）の存在により、より自由な選択が可能となると結論づけた。報告者は大澤真幸、E. バーリン、A. センらの自由や偶然性・必然性の概念を用いて選択制カリキュラムの矛盾に鋭く切り込んだといえよう。しかし、一方で学校の選択（受験）との関係など素朴な疑問も提起された。

「障害者スポーツの『統合』に関する一考察」

藤田紀昭（日本福祉大学）

本報告は障害者がスポーツを行うことについての健常者の評価の問題に着目しその問題点を明らかにすることにより、スポーツにおける価値の多様化の可能性を探ろうとするものである。報告者は障害者のスポーツを観た人々が「障害があるにもかかわらずがんばっている。五体満足な自分をもっと頑張らなくては」という感想をもち、

「優れた健常者、劣った障害者」というステレオタイプ化された見方をしがちであり、そのことがかえって障害者にとって住みづらい社会を作り出している」と指摘する。つまり、パラリンピックなどの障害者の競技スポーツは健常者の競技スポーツと同じ価値を追求し、そのことによってパフォーマンスの差異を明確化し、障害者のパフォーマンスをより下位のものとしてランク付けするという結果になってしまっているとしている。ここから報告者は「分離・統合」と「価値の一元化（同化）と価値の多様化（異化）」という2つの軸を用いて障害者スポーツを4つの象限で捉え「異化・統合」の象限への移行、すなわち他と異なることを前提とし、差異をそのまま受け入れることによって障害者そして健常者両者が真に住みやすい社会が実現するのではないかとした。報告中に種々の障害者スポーツの場面がビデオによって紹介された。ただし、見えない障壁をどのように取り去っていくかという問題は残るのではないかといった意見や、この問題は障害者スポーツにとどまらず、様々なスポーツ活動の現状を見つめ直すことにつながるといった意見が出された。

一般発表3 - A 座長：黒須 充（福島大学）

『『地域密着型』スポーツクラブの展開とプロデューサーの役割』

松野将宏（東北大学大学院）

松野氏は、「地域密着型」のスポーツクラブを研究対象に取り上げ、その発展段階モデルとプロデューサーの役割について、ミクロ組織論的な分析を試みた。

まず、スポーツクラブの発展を「スポーツクラブの発生」、「核組織の形成」、「地域の社交場への拡大」の3つの段階に分類し、プロデューサーの役割について、延べ30名に面接調査を行った。その結果、プロデューサーの役割として、A．自立的行動（行動における役割）、B．構想の仮説検証（構想における役割）、C．関係性の発展（対人関係における役割）の3つに類型化できるといった発見的事実を見出した。

フロアからは、3つの発展段階と3つの役割モデルは、地域スポーツクラブ特有のものなのか、それともイノベーション（組織変革）の過程に発生するものなのか、その違いを明確にすることが必要ではないかといった指摘がなされた。

いずれにせよ、スポーツを事業として成立させるための「マネジメント」はこれが

らのスポーツ界の発展に欠かせないキーワードであり、氏の今後の継続的な研究に期待したい。

「総合型地域スポーツクラブの比較研究 行政主導と住民主導」

安田洋章（岡山大学大学院）

安田氏は、現在、全国的な広がりを見せる「総合型地域スポーツクラブ」を研究対象に取り上げ、行政主導型クラブと住民主導型クラブの違いについて、キーパーソン、設立のプロセス、行政の関与、既存団体との関係、将来ビジョンなど17項目から比較検討を試みた。

その結果、行政主導型クラブでは、設立（安定）から運営（不安定）へのプロセスの中で、熱心な行政職員が異動したり、補助金がストップしたりすると活動が停滞してしまうといった問題点を、住民主導型クラブでは、設立（不安定）から運営（安定）といったプロセスの中で、行政とのパートナーシップが重要であることを明らかにした。

フロアからは、公設民営か民設民営かといった比較よりも、住民の自治能力の違いによって総合型地域スポーツクラブの発展にどのような影響があるかについても調べることが必要であるといった指摘がなされた。

いずれにせよ、わが国のスポーツ政策と総合型クラブ育成の手法に矛盾があることを示唆した発表として、氏の今後の研究に期待したい。

「地域スポーツ組織の公共性に関する一考察（3）」

水上博司（三重大学）

水上氏は、1998年より足かけ4年、岸和田市山直中学校区のスポーツクラブづくりに関わり、フィールドワークを続けており、総合型地域スポーツクラブの公共性について、社会的共通資本といった新たな概念を用い、机上論ではなく、あくまでも実践事例の中から検証を試みようとしている。

氏の研究スタイルは一貫しており、総合型地域スポーツクラブ政策を「新しい地域統合組織への期待」、「スポーツ振興の期待・願望モデル」、「スポーツ組織の分裂支配

の構図に対する改革のメッセージ」として位置づけ、「クラブ文化論」の構築を目指している。

フロアからは「公益」と「公共」の違い、「私事性」と「公共性」の違いなどについて質問が出され、ローカリティとグローバリティを結ぶネットワーク社会の出現とクラブの関係性について、より研究を深めてほしいといった期待が寄せられた。

一般発表3 - B 座長：清水 諭（筑波大学）

「メディアとスポーツ 日本のボクシング事情から 」

藤山 新（東洋大学大学院）

メディア論として括れるであろうこのセッションのなかで、最初に発表した藤山氏はメディア・コンテンツとしてボクシングがもつ特徴とそれをめぐる制度的関係の現状を示した。藤山氏は、「ヒーロー」を必要とするテレビ局に対して、リング上の「真剣勝負」をふまえた上で「物語性」の創出がなされなければならないという関係の上にコンテンツとしてのボクシングがあること。そして、選手を抱えるボクシングジムの会長が「プロモーター」を兼ねていることは、商品化される選手を練習場面から作り上げ、ジムやジムにおける選手間の格差を生んでいると述べた。氏の発表は、ボクシングだけに言えるものではないため新たな知見を得られず、また語の意味も曖昧なため、フロアには失望感広まった。ボクシングのテレビ中継における歴史的事実とボクシングの象徴的意味、ボクシングジムをフィールドとした研究の分析、あるいはフィールドをふまえてテレビ局やジム関係者の制度上の問題点を明らかにしていくような作業を少しでも加えれば違ったかも知れない。

「カナダ人とアイスホッケー：『1972年カナダ対ソ連シリーズ (The 1972 Canada vs USSR Series)』の意味するもの」

嘉納もも（京都女子大学現代社会学部）

のちの2題は、映像とその記憶、およびそこに表象・代表化されている意味を問い、分析したものである。嘉納氏は、プロが出場を許されていなかった当時のオリンピック大会で力を誇っていたソ連に対し、多くのプロ選手が NHL で活躍するカナダ代表が事実上の世界一決定戦を繰り広げた1972年の映像を示しながら、スポーツ・イベントの記憶をナショナル・アイデンティティの視点から考察した。前半4試合をカナダ各地で戦いながらも1勝2敗1分け、後半4試合をモスクワで戦うことになり、すぐさま1敗して負けられない状況に追い込まれたカナダチームが、トータル4勝3敗1分けで制したシリーズ。これを嘉納氏は、カナダ人の個人史におけるレファレンスポイントになっていて、その後もことあるごとにこの映像が流され、「カナダ人にとっては、自分たちが帰る拠り所となっている」と述べる。嘉納氏は、冷戦下で、西側/東側、自由な資本主義/共産主義、シーズン前のぶよぶよの身体にヘルメットを被らないプロ/引き締まった身体にヘルメットを被った「不気味なロボット」といった二分法とステレオタイプが構築されたが、ソ連の強さを目の当たりにして「カナダ = No.1 幻想」を捨て、かつ上記のような二分法を再考させる「一つの時代の終焉」と位置づけられたと言う。また、ポリティカルかつカルチュラルな背景のなかで、その後も記憶が再生産されるインパクトの強い出来事として、ジェシー・オーエンス（1936）、東洋の魔女（1964）、表彰台におけるブラックパワーの提示（1968）、そしてこのカナダ対ソ連（1972）を上げた。スポーツ・イベントの意味とその後も映像が再生産されていく状況を分析する試みは、ナショナル・アイデンティティを考える上で興味深い。しかしながら、民族、人種、そしてジェンダーの複雑な絡み合いのなかで、こうしたイベントがどのカナダ人にどのように解釈されてきているのかを考える必要がある。フロアからも声があったように、特に白人男性がヘルメットなしで「ハードワーク」するプレイスタイルに称賛の声を上げるのは誰なのか、今後の研究の深まりを期待したい。

「『銀盤の女王』の誕生 ソニヤ・ヘニーを手がかりに」

中川敏子（日本女子大学大学院）

中川氏は、女子フィギュアスケート競技が、競技におけるスキルそのものよりも「若さやコスチューム」に注目されてしまう点を「銀盤の女王」という言説とそれが包含してきた意味から分析しようとし、それをオリンピック大会3連覇(1928・32・36)、世界選手権で10連覇を成し遂げたアメリカ出身のスケーター、ソニヤ・ヘニーが主演した映画6作品(1937～39)を題材にして考察した。まず、1920年代におけるシヨースケートの衣装、女性たちの健康、美容、そしてファッションへの関心の高まりとそこにおけるスポーツの意味をカルチュラルなコンテクストとして述べる。そして、映画のなかで「銀盤の女王」が1)「若さ」2)地位のある男性からの求愛、結婚、円満な家庭生活3)郊外から都市への地理的移動4)「若さと性的魅力を呈示する」コスチューム5)親子関係を軸とした家族という要素から生まれてきていると分析した。氏は、これらの映画によるイメージにヘニーそのものも重なった形で「銀盤の女王」が誕生したと言う。しかしながら、それが「古き時代の価値観を内包した」にしても、その後、「成熟した女性のセックスアピールを強調したカタリーナ・ピット」や高度なスキル重視の選手たちがどのように捉えられてきたのか。映画上映当時、ほかのスポーツにおける女性の表象のされ方、あるいは「銀盤の女王」が民衆にどのように捉えられたのかといった多面的な分析が必要であることは言うまでもないだろう。中川氏がこのテーマを自己の研究上どのように位置づけるのかが重要と思われる。

一般発表3 - C 座長：金崎良三（佐賀大学）

「スポーツ・スペクタクルのなかにあるポスト・コロニアリズムのかたち」

海老原修（横浜国立大学）

ポスト・コロニアリズムは、東西冷戦体制が終わり国際社会が新たな秩序を求めて動き出した1990年代以降、特に文化の領域で語られることが多いが、海老原氏はまず欧米列強による文化的統制に潜む経済的事情の考察から始めて、国家的スポーツイ

ベントにおける経済的仕組みやプロスポーツの世界において、原料であるとともに労働力でもあるスポーツ選手の市場について語る。またW杯サッカーを例に、そこには植民地支配や人種差別等を可能にした西洋のオリエンタリズムという文化的装置が特に監督と選手の間働いていると見る。プロボクシングやアメリカのメジャーリーグ野球、プロバスケットボール、W杯サッカー等を通じて、スポーツに見られるポスト・コロニアリズムのかたちを例示した興味ある発表であった。

「東京都高校サッカー部における部員数と中途退部者に関する調査研究」

澤井和彦（東京大学大学院）

澤井氏は、学校の運動部は「スポーツ」と「学校教育」というシステムが交差する領域であるにもかかわらず、従来の運動部活動研究がこれらを区別することなく進められてきたという。そこで、これらのシステムの作動を区別する観点に立って、高校のサッカー部顧問教師を対象に質問紙調査を実施してデータを解析し、サッカー部への入部数や退部率への学校制度の相違、下位文化、生徒のコミュニケーション・パターンの差の影響について言及した。そして、部活動への継続的参加を規定する要因が、部活動の指導内容や活動の活発さといった「スポーツのコミュニケーション」よりも偏差値が規定する「学校的コミュニケーション」が優位であったことから、部活動を継続することは必ずしもスポーツへの社会化とはえないとの結論であった。従来のスポーツへの社会化研究には見られなかった報告であり、今後さらにデータを積み重ねて検証を深めていっていただきたい。

「Jリーグの理念形成のフィギュレーション分析 特に日本プロ野球機構との相互依存に注目して」

河北健太郎（京都教育大学大学院）

河北氏は、Jリーグの理念に関する先行研究を検討した結果、その形成過程や関係性を重視するフィギュレーション理論の考え方が欠如していたため、Jリーグ理念の形成・強化、社会学的考察及びJリーグを取り巻く関係性への考慮がなされていないと指摘する。そこで本発表は、その考え方を導入してJリーグ理念の形成過程をプロ

野球機構との敵対関係において考察したものである。その方法として、Jリーグ理念を支持する朝日新聞とプロ野球機構を支持する読売新聞の記事・主張を取り上げ、二社の敵対関係やJリーグの理念の中枢をなす地域密着の問題、Jリーグヴェルディ川崎の移転問題、横浜フリューゲルススの合併問題等が検討された。ここでは、Jリーグ理念の形成時期やその形成に影響を与えた新聞社の位置づけをめぐって活発な議論がなされた。

一般発表 4 - A 座長：亀山佳明（龍谷大学）

「芸道におけるフロー体験の社会学的研究」

迫 俊道（広島修道大学）

迫氏はスポーツ活動をフローの視点からとらえようとしてきた若手の研究者である。今回は従来からの研究を踏まえて、さらに一步をあゆみ出そうとした発表であった。周知のように、フローモデルは心理学の領域において考案された理論であり、それゆえに他者との問題については不十分と思われる点があった。それを埋めるには「複雑さの問題」を考察する必要がある、というのが問題の設定であった。チクセントミハイによれば、「複雑さ」とは他者から自己を差異化するとともに統合化することによって自己に複雑さが加えられるというものである。これは形式論理からすればパラドックスと見えるのであるが、実践においてはいかように経験されているのかを試してみることが、今回の迫氏の発表のポイントであった。迫氏はこれを神楽の舞い手に対する参与観察を行うことで実証しようとした。舞い手は囃し手や観客との一体化(統合化)するとき、もっともよく自己を差異化できるという。このように形式的にはパラドックスと思える事態が実践においてはそうではなくなるということに、スポーツや武・芸道の特徴があるのであるが、次にはこれをどのように理論化するかという問題が浮上してくる。迫氏の発表はチクセントミハイの議論に沿いながら、それを一步踏み出す地点にまでさしかかっている。

「ある空手道場の秩序と変動に関する一考察」

大山智徳（広島郵便局）

大山氏は、自らかの六年にわたる空手道場での修業体験を踏まえて、道場における秩序の問題をとらえようとする。秩序の問題は社会学のいわば正統的な問題ともいえようが、大山氏はこれを身体の問題として設定しようとする。道場では身体の「型」がさだめられており、成員はこれを自らの身体に植え付けるべく、日々の鍛錬に励むのである。型とは創始者の開発によるものであり、その習得のレベルに従って段位が授与される。これが道場の規範をなすという。しかし、実際の実力と段位とは必ずしも一致することはない。下位のものが上位のものを倒すことがありうる。この事態が頻発するならば、そこに秩序の揺らぎが生じずにはいられなくなる。実際、大山氏の所属する道場においてこのような事態が観察されたという。しかしながら、そこにおいては秩序の解体は生じず、逆に新たな成員の増加をもたらしたり、成員の動機を強化させるという意外なじたいが起きた。このような効果はいわば逆機能ともいうべきものと評価されようが、いくつか疑問な点もあげられる。たとえば、道場の秩序問題が先のような身体問題として立てられるのか、あるいは実力と段位とのずれは本当に秩序を脅かすのか、などである。

「『わざ』言語の位置づけをめぐって 意味から実践へ」

倉島 哲（日本学術振興会）

倉島氏は武道の実践を身体の問題として研究している研究者の一人である。今回はそうした従来からの研究をもとに、伝統的な武・芸道にみられる「感覚言語」のもつ意味をさぐる。感覚言語とはスポーツや武・芸道において指導する際に使用される独特な言葉使いのことである。「降る雪をつかむように手を挙げよ」などである。これはまた「わざ言語」ともよばれてきたのであるが、そのような言語使用は背後に意味を共有する共同体が前提されている。言語の比喩的な使用はそれゆえに、受け手にたいして本当に新しい意味をもたらすわけではないことになる。倉島氏はこのような新しい意味を生み出す比喩言葉の使用に注目しようとする。なぜなら、それによって従来の身体研究、フーコーの権力論・モースの身体技法論・ブルデューのハビトゥス論、という社会決定論を超え出る視点が開かれると期待できるからである。端的にいえば、定着論から生成論へのシフト・チェンジが可能になるということである。しかしなが

ら、そのよってたつ理論には疑問が残る。というのも、氏はあくまで言語中心主義を貫こうとされるからである。ヴィッゲンシュタインの慣習の議論がそうであるが、そうすればやはりまた定着論に舞い戻るように思えるのであるが、いかがであろうか。

以上のように、三者に共通するのはあくまでフィールドによりながら理論を考えようとする点であろう。また、先日に行われたテーマセッションと関連させるなら、身体論の定着論から生成論へのシフトがみられるのではないか、ということである。身体問題は社会学を超え出る領域であり、それゆえにこそスポーツ社会学会が独自性を提出できる可能性をもつ。果敢に挑戦していただきたいと思うものである。

一般発表 4 - B 座長：佐伯年詩雄（筑波大学）

「逃散する「出稼ぎボクサー」たち 固有のフィールドからみたグローバル化の諸相」

石岡丈昇（筑波大学大学院）

本報告は、フィリピンから来日している「出稼ぎボクサー」に焦点を当てることにより、「ポリティカル・エコノミー主義」の優越するスポーツ・グローバリゼーション分析に一石を投じ、そのオルタナティブな側面を捉えようとするものである。日本人ボクサーに対するいわゆる「かませ犬」役を引き受け、来日の機会を手にし、相当の稼ぎを期待してやって来たフィリピン出稼ぎボクサー達は、それのみでは大金を稼ぐどころか生計を維持できない状況に遭遇する。そこで彼らは、それぞれの生活状況の中でたくましく生きるための生活戦略を立て、彼ら自身の相互扶助的ネットワークを形成し、さまざまな就労の機会を探り、より好条件の職場に移動するのである。彼らの生活戦略は、雇い主の同情や親切につけ込むこと、職場の物品を掠めること、怠業等から職場を突然脱出する「逃散」にまで至る。日陰の競技者の視点からスポーツ・グローバリゼーションを整理する視点は新鮮であるが、彼らの生活戦略におけるスポーツ（ボクシング）の位置と意味が論じられるべきであろう。

「スポーツの『伝播』をめぐって フィリピンにおけるゲートボールと伝統的格闘技の事例」

高畑 幸（大阪市立大学）

本研究は、メディア、市場等のグローバリズムを先導するメガ・パワーの片隅で、人々の交流によって生ずる相対的に「偶発的なスポーツ伝播」の事例をとりあげ、スポーツ・グローバリゼーションの重層的な側面を報告しようとする。事例の一つは、フィリピンにおけるゲートボールの普及である。これは、戦前に移住した日本人移民が老後の楽しみとしてゲートボールの中古用具をマニラ市に寄贈したことを契機にし、マニラ邦人会を中心に展開したもので、組織や団体と無関係に生じたスポーツの国際普及である。もちろん、この事例の背景には、1990年代に急速に進展した「日本の新しい東南アジア進出」が存在する。もう一つの事例は、フィリピンの伝統的格闘棒術「アルニス」の北米への伝播である。この伝播は、国内における伝統スポーツの復興を背景にしながら、専門職労働者を中心とするフィリピン人の北米移住に伴って生じている。両事例とも、スポーツ愛好者の国際的移動によって非意図的・計画的・組織的に生じているスポーツ伝播であり、マクロなグローバリズムを相対化する意味を持つが、移民や移住におけるスポーツの意味についての検討が望まれよう。

「イタリアスポーツの動向」

依田充代（日本体育大学）

本報告は、イタリアオリンピック委員会の後援の基に2001年行われたスポーツモニター調査の結果から、イタリアスポーツの現状について分析するものである。報告は、性、年齢、学歴別のスポーツ実施率、種目別の実施率、行いたい種目の選好率、スポーツ観戦・視聴・購読の種別率等の多岐にわたる。日本との比較から見る特徴としては、都市施設型スポーツが主流であること等が指摘された。加えて、近年のイタリアスポーツ動向で注目すべきこととして、プロチームを保有するクラブとその連合体であるレガの力が強くなり、オリンピック委員会やサッカー連盟の力が相対的に弱体化しつつあることが報告された。特に、オリンピック委員会の権力の弱体化はトトの衰退、サッカー連盟のそれは放映権管理の衰退と、共に近年におけるスポーツ・マーケットの変化を繁栄していることは、極めて興味深い。また、政権の右傾化により、

体育・スポーツ政策に変化が生じていることも報告された。膨大なサンプル数が計上されているが、こうした調査方法の詳細やデータの意味内容の解釈が示されれば、貴重なデータがより良く生かされると思われる。更なる精度の高い分析と解釈が期待されよう。

一般発表 4 - C 座長：井上 俊（甲南女子大学）

『高卒若年層』文化の創造と『身体の痛み』 新宿路地裏にたむろするスケートボーダーの生活実践から

田中研之輔（一橋大学大学院）

報告では、新宿路地裏でのスケートボーダーの文化的実践と、それらを取りまく都市的な諸要因（管理・監視・排除）との双方の記述から、「空間」と「身体」と「文化」の都市的な関係性を具体的に提示した。先行する研究については、以下の4点にまとめた。1）「都市空間」と「生きられた世界」の記述（アーバン・エスノグラフィ）に関する都市社会学的な研究群を整理した。2）「空間論的転回」以降の「空間認識」について、アンリ・ルフェーブの「空間の生産」とその他の著作の再評価のインパクトを再考した。さらに、3）北米スポーツ社会学の下位文化研究と、4）都市地理学や文化地理学、都市建築学などの隣接領域の研究群の整理から、「ストリート・サブカルチャー」への着眼傾向について指摘した。

これら理論的整理の検討と、スケートボーダーが共有している「身体の痛み＝経験そのもの」の重層的記述の分析とストリート・スケータリングのVTRを交えながら、最後に4点の問題提起をおこなった。第1に、都市的な要因と下位文化が創出される「場所」の焦点化。第2に、「表象（スタイル、隠語等）」のポリティクスに収斂される下位文化研究を「開いていく」こと。第3に、「経験」そのものの記述の蓄積から「生きられた空間」を具体的に抽出することの意義。そして、第4に、身体論の新たな研究領域として、「（身体の）痛み」への着眼についてである。

「ボクシングサブカルチャー研究 ジムの構造分析を用いて」

池本淳一（大阪大学大学院）

報告者は現在、2001年8月より行っているジムのフィールドワークをまとめる段階にありますが、そのジムが生み出すボクシングサブカルチャーの日本の特徴と、「武道に似たもの」としてボクシングを解釈する日本のコンテキストの特徴を確認するためには、その原型であるアメリカのゲッターとの比較が欠かせません。そのため、今回の報告では質的調査をメインとした都市社会学におけるボクシング研究のレビューを通じて、ゲッターのジムを一つの理念型として構築することを試みました。ディスカッションでは、主に「そもそもアメリカと日本の比較が出来るのか?」「貧困を強調しすぎていないか?」等の質問を受けましたが、前者には文化比較ではなくジムの制度比較によってコンテキストの差異を明らかにしたい、後者には、先行研究ではそれが暗黙の前提になっており、今回の報告でそれを浮き彫りにすることができたのではないかと返答しました。

「プロ野球私設応援団のフィールドワーク（その2）」

高橋豪仁（奈良教育大学）

プロ野球のスタジアムには大勢のファンが集まる。こうした大衆社会的状況から、応援という共通の目的の為に結集する自発的結社である私設応援団が如何にして形成されているのかを、参与観察による継続的な調査研究によって明らかにする。前回の発表（2000年）では、集合的な応援行動という規格化された大衆行動レベルの状況から、第一次的関係をもつ集団が形成され、メンバーたちは集まることの心地よさを感じていることを報告したが、今回の発表では、集団内の軋轢や集団間の力関係に焦点を当てて報告した。参与観察している応援団における2人の副会長の対立を巡る事例と、この応援団が属する全国連盟の会長が失脚する事例を通して、応援という下位文化をもつ集団が、人々の相互作用を通して如何にして編成・修正・維持されているかを記述することを試みた。本来的に彼らの prestige は不安定なものであり、その力関係は常に逆転をはらんだ流動的なものであるが故に、「旗振り」や「リード」の儀礼的な応援行動でその秩序を維持する必要がある。こうした球場での儀礼的行為や示威的コミットメントの他にも、球団や選手との距離の近さが、彼らの社会的勢力

の資源となることが示唆された。

* * * * *

以上の三つの発表に対し、フロアからも、また報告者相互間でも、活発な質疑応答がおこなわれ、興味深い部会となった。三つの発表はいずれもスポーツをめぐるサブカルチャーの問題を扱っている点で共通していたが、一般に社会学におけるサブカルチャー研究の意義は、主として次の三点にあると思われる。すなわち、第一に日常的な視線の届きにくいサブカルチャー世界の実態を明らかにすること、第二に社会学の理論や命題をサブカルチャー世界に適用して、その有効性を検証すること、そして第三にサブカルチャー世界のフィールドワークから得られた知見を社会学にフィードバックし、社会学そのものに新しい要素を付け加え活性化していくこと、である。今回はどの発表も、重点の置き方に違いはあっても、これらの三側面すべてを含んでおり、それぞれに今後の展開が期待される内容であったと思う。

研究委員会からのお知らせ

松田恵示（岡山大学）

2003年 - 2004年度の研究委員会のメンバーは次の通りです。荒井貞光（広島市立大）、井上俊（甲南女子大）、リー・トンプソン（早稲田大）、松田恵示（岡山大委員長）。どうぞよろしくお願いいたします。

学会も設立より12年を過ぎ、いよいよ充実期に入ってきたように思われます。本学会は、学際的な性格を強く持ち、国際交流も活発で、自由な研究エネルギーに満ちている、といった独特の気風をもっています。こういう財産を、まずはしっかりと受け継いでいくことを、研究委員会としては大切にしていきたいと思えます。一方で、急激な社会変化を背景に、学会活動に対する会員のみなさまからのニーズや社会からの評価の視点も変化しており、さらには、理論的な方向と実証的な方向、政策科学的な方向と文化研究的な方向、若手/中堅/ベテランといった世代間格差など、研究関心の多様性を踏まえ、学会の研究活動を推進していくための課題ももちろん少なくはありません。こうした中で、会員のみなさまの忌憚のないご意見、ご提案を広くうかがいながら、今期の活動を進めていくことができればと思います。会員のみなさまの積極的なご支持とご協力をいただくことが出来ますようお願い申し上げます。

そこで、研究委員会からのお知らせです。今期も前期と同様に、研究委員会のプロジェクト活動として、「課題研究」を行いたいと思えます。そこで、会員のみなさまから、「課題研究」で取り組むテーマについて、広く御意見、御提案をうかがいたいと思えます。

7月19日（土）までに、研究委員会メールアドレス（project@jsss.jp）またはファックス（086-251-7666）までお送り下さいますようお願いいたします。

研究委員会で検討した後に、学会ホームページ上にて、8月上旬を目処に今期の課題研究テーマと参加希望者の募集についてご案内をさせていただきたいと思えます。掲示情報へのアクセスを含めまして、どうぞよろしくお願いいたします。

編集委員会からのお知らせ

菊 幸一（筑波大学）

「スポーツ社会学研究」第12巻の投稿に関するお知らせ

1 投稿締め切り日と投稿先

*投稿締め切り日 2003年8月25日（月）当日消印有効・締切日厳守

（なお、来年度第13巻の投稿締め切り日もおおよそ同時期になるとお考えください）

*投 稿 先

〒112 0012 東京都文京区大塚3 29 1

筑波大学大学院体育研究科 菊 幸一 研究室気付

「スポーツ社会学研究編集委員会」

*投稿に関する問い合わせ

TEL/FAX：03-3942-6391（但し、7月以降にお願いします）

E mail: <editor@jsss.jp>

2 投稿に際しての諸注意

*投稿規程の厳密な適用

『スポーツ社会学研究』誌の巻末に記載されている投稿規程をよく読んで、その内容を厳守してください。例年、以下のような事項が問題となりますので、とくに初めて投稿される会員は注意してください。

- ・原著論文の場合、字数は図表を含めて16,000字以内に収めること。
- ・執筆要領に従った文献の記述の仕方を行うこと（とくに引用文献について）。

*投稿規程が守られているかどうかは、査読の際、審査の対象になります。

3 編集のスケジュール

5月24日（土） 第1回編集委員会

8月25日（月） 投稿原稿締め切り（当日消印有効）

9月06日（土） 第2回編集委員会

追加編集委員の集合。査読者決定・査読依頼。査読書類確認

10月06日（月） 査読結果の報告締め切り

10月11日(土) 第3回編集委員会

第1回目の査読結果の検討。執筆者への査読結果の連絡と修正意見の送付

11月17日(月) 執筆者による第1回目修正原稿の投稿締め切り。修正原稿をそのまま査読者へ送付し、第2回目の査読を依頼

12月15日(月) 第2回目の査読結果報告の締め切り

12月20日(土) 第4回編集委員会

第2回目の査読結果を総合的に検討し、諾否を判定。なおも査読の余地があれば、査読担当編集委員の責任においてコメントを付し(あるいは査読者のコメントをそのまま付して)、最終の修正原稿を投稿者に依頼

2004年1月中旬 原稿の最終締め切り。査読担当編集委員に掲載諾否の最終確認

FD入稿・印刷屋に依頼

(この間、著者校正1回のみ)

2004年2月末から3月初旬 最終の印刷開始

2004年3月末 学会大会にて配布

ホームページ委員会からのお知らせ

杉本厚夫（京都教育大学）

今年度から本学会の新しいホームページを立ち上げることができましたので、お知らせいたします。これは、昨年度の総会でお認め頂いた学会独自のドメインを獲得し、新たなバージョンでのホームページの展開となるものです。

このことによって、下記の事柄が変更になりますので、ご注意願います。

1) 学会独自のドメインを取得しました。

新ホームページのアドレスは、<http://jsss.jp>です。

京都教育大学にあった旧のホームページからは転送されるようになっています。

（ブックマークの付け替えをお願いします）。

2) 事務局等のメールを固定しました。

上記のことにより、事務局や各種委員会等のメールアドレスが次のようになりました。

事務局： secretary@jsss.jp

編集委員会： editor@jsss.jp

研究委員会： project@jsss.jp

国際交流委員会： overseas@jsss.jp

会報： doc@jsss.jp

3) 会報をPDFで電子化する。

ペーパーによる会報は今回（35号）と次回（36号）で終了し、37号からはホームページ上のPDFで会報をご覧頂くこととなります。ペーパーが必要な方は、PDFからダウンロードしてご覧頂きたいと思います。

4) メールによる情報サービス。

最新情報はホームページ上でお知らせしますが、情報のアップや緊急を要する情報については、メールアドレスを登録された会員の方に、メールでお知らせいたします。まだ、メールアドレスを事務局にお知らせ頂いていない方は、至急メールで上記の事

務局アドレスまで、お知らせいただきますようお願い申し上げます。メールアドレスのご登録がないと、このサービスを受けることはできません。

以上

何か不明な点がございましたら、事務局までお問い合わせください。

旧事務局からのお知らせ

山下高行（立命館大学）

2002年度第二回理事会、新現合同理事会、2002年度総会報告

2003.03.22、於 岡山大学

*議題内容が重複していますので、理事会議題内容は議題のみの提示とし、総会報告にて報告内容といたします。また併せて各委員会報告をご参照ください。

2002年度第二回理事会議題

編集委員会

- 1) 学会誌第11号発刊状況
- 2) 編集委員会決算
- 3) その他

国際交流委員会

- 1) 本年度事業報告

研究委員会

- 1) 本年度事業報告
- 2) プロジェクト研究活動状況
- 3) 2002年度決算
- 4) その他

HP委員会

- 1) 本年度事業報告
- 2) 新しいHPの運営について
- 3) その他

事務局

- 1) 新入・退会会員承認（別掲新入・退会会員一覧参照）
- 2) 会員動向・会費納入状況
- 3) 会報発刊状況
- 4) 日本学術会議に関する報告
- 5) 次期役員選出状況

6) 2002 年度事業報告・決算 (監査報告を含む)

7) その他

新現理事会議題

事務局

- 1) 新規役員確認、各部局担当の配置について
- 2) 次年度大会について
- 3) 会報の電子情報化に関する提起
- 4) 2003 年度事業計画と予算案 (含名簿改訂作業進捗状況)
- 5) その他

2002 年度総会報告

議長選出 厨義弘会員

- 1) 役員選出結果報告 (事務局長)

選挙の結果、次年度理事会として以下の会員が選出された旨報告。

荒井貞光、井上俊、亀山佳明、菊幸一、佐伯年詩雄、杉本厚夫、Lee Thompson、萩原美代子、平野秀秋、松田恵示、森川貞夫、山口泰雄、山下高行、以上 13 名
(アイウエオ順敬称略)

- 2) 平野会長挨拶
- 3) 各委員会報告

編集委員会

1. 学会誌第 11 号発刊状況
2. その他

国際交流委員会

1. 本年度事業報告

研究委員会

1. 本年度事業報告
2. プロジェクト研究活動状況
3. その他

HP 委員会

1. 2002 年度事業報告
2. その他

事務局

1. 会員動向・会費納入状況

2002年度会員動向。

1) 新入会員・退会会員

新入会員；11月理事会承認・・・13名、3月理事会承認・・・18名。計31名

退会会員；11月理事会承認・・・14名（うち会費未納者10名）、3月理事会承認・・・3名 計17名

2) 会員数

正会員303名 学生会員87名 購読会員3名 計393名（新入会員含む）

（このほかに購読会員として図書館が7件あり）

3) 会費納入状況

納入者284名 未納入者115名

2. 会報発刊状況

2002年度会報32, 33, 34号発刊の旨報告。

3. 日本学術会議に関する報告

申請、審査を経て日本学術会議第19期学術研究団体（社会学、体育学・スポーツ科学）として登録された旨報告。

4. 次期役員について

次期役員として以下のような配置を行う旨報告（幹事、監事は理事会承認）

会 長：平野秀秋（法政大学）

理 事 長：森川貞夫（日本体育大学）

事 務 局 長：杉本厚夫（京都教育大学）

学術会議関連委員：佐伯年詩雄（筑波大学）

編 集 委 員 会：菊幸一（委員長：筑波大学）、佐伯年詩雄（筑波大学）、亀山佳明（龍谷大学）、萩原美代子（文化女子大学）

研 究 委 員 会：松田恵示（委員長：岡山大学）、井上俊（甲南女子大学）、荒井貞光（広島市立大学）、リー・トンプソン（早稲田大学）

国 際 交 流 委 員 会：山口泰雄（神戸大学）、山下高行（立命館大学）

幹 事：高橋豪仁（奈良教育大学）、河原和枝（京都橘女子大学）

監 事：東元春夫（京都女子大学）、澤田和明（滋賀大学）

5. 名簿改訂作業進捗状況

名簿原稿回答者が160名前後にとどまり、再度の呼び掛けと名簿発行を遅らせ

次年度7月頃行う旨報告

4) 審議事項

1. 2002年度事業報告と決算(事務局:別掲決算表参照)

2002年度予算にもとづき、2002年度事業(第11回大会、学会誌第11号発刊、会報32, 33, 34号発刊、研究プロジェクト活動、等)報告。名簿発刊が次年度となり当初予算を次年度予算に組み込むとする点、および本年度財政の特徴について説明、併せて天野郡寿監事より監査報告が行われ、質疑の上承認。

2. 会報の電子情報化について(事務局)

昨年度総会に引き続き、会報電子情報化に関し、理事会よりこの間の会員数の急激な増加により会報発刊が財政上、事務局実務負担上困難なものとなっている点。また現在のシステムでは海外学術雑誌から本会員への投稿依頼、会議案内等に迅速に対応し得ない等のことから、2003年度より会報を電子化し、これらの懸案に応えるものとする旨提起された。具体的には2003年度以降、会報は年三回、PDF形式による電子情報として発刊する。電子化による会報を希望しない会員にはハードコピーの形式により郵送する。2003年度は経過的措置として、第35号、第36号に関しては従来どおり紙媒体による会報発行を行う。この二号を通し会報電子情報化について周知徹底するとともに、ハードコピー形式による郵送希望について、申し出をお願いすることとする。会報電子化は、サーバー、およびメールマガジンリストが完備する秋以降の第36号より紙媒体による発刊と平行して行うものとし、37号以降電子化による発刊に完全移行を行うものとする、以上提起され、種々審議の上、了承。

3. 新しいHPの運営について(HP委員会)

学会情報伝達の電子化を整備し、事務局アドレスを固定するため新サーバーに移行し、HPを刷新する。また、併せて今後の情報伝達としてメーリングリストを作成し、速やかな情報伝達を可能とするシステムを構築する旨提起、了承。

4. 2003年度事業計画と予算案(別掲予算案参照。事務局)

2003年度の事業計画と予算案について提起。

主事業計画として(1)第12回学会大会の開催、(2)『スポーツ社会学研究』第12巻発刊。(3)会報第35、36、37号発行(第37号は電子情報による)、(4)学会情報伝達の電子化整備(新サーバーへ移行、HPの刷新、会報の電子情報化等。)(5)新名簿の作成。これらの事業計画に基づき別掲予算案を提示、了承。

5. 次期大会開催について。

北海道地区（北海道教育大学旭川校）にて開催を引き受けてくださることとなった旨報告。開催側を代表し鈴木文明会員のご挨拶。

以 上

新規名簿作成ご協力のお願い

総会でご案内いたしましたように、現在日本スポーツ社会学会新規名簿の作成を行っています。このため昨年度より会員の皆様に名簿原稿のご依頼を行っていますが、現時点（5月）でも半数近くの方の原稿が未提出のままとなっています。

既にご案内いたしましたように、原稿未提出の方の住所、所属等は事務局で把握しているものを使わざるを得ませんが、必ずしも所属変更等が十分に反映していない不正確なものです。このためまだご提出のない方は大至急下記旧事務局までお知らせくださるようお願い申し上げます。6月下旬に入稿、印刷となりますので遅くとも6月下旬までにご連絡ください。

1. お名前（よみがな）、2. 所属、3. 所属住所、電話 / Fax 番号、4. 自宅住所、電話 / Fax 番号（掲載の有無を必ずお知らせください。回答無き場合は掲載と判断いたします）。5. 研究領域（キーワードで簡潔に；例、ジェンダーとスポーツ、など）

連 絡 先

旧事務局、立命館大学産業社会学部 山下高行

yama@ss.ritsumei.ac.jp Fax: 075-466-3157

新事務局からのお知らせ

事務局長 杉本厚夫（京都教育大学）

この度、平成15年度・16年度の2年間、事務局を運営させていただくことになりました。皆様のご協力を得て、日本スポーツ社会学会の発展のため、微力ながら務めさせていただきますので、何卒よろしく願いいたします。

この2年間は、経費の削減を含めて事務の電子化という大きな課題に取り組んでまいります。皆様には、移行に伴い大変ご迷惑をおかけするかと存じますが、何卒ご容赦いただき、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

次のような変更点がございますので、ご注意ください。

1) 事務局の住所等の変更

新事務局の住所・電話番号・メールアドレス・郵便振替は次の通りです。

〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1

京都教育大学 杉本厚夫研究室気付

TEL：075-644-8283

E-mail：<secretary@jsss.jp>

郵便振替：「日本スポーツ社会学会事務局」00390-0-43962（これまでと変更ありません）

2) 会費納入について

経費節減のため、本年度から郵便振替の手数料は、振込み者負担とさせていただきました。手数料の70円をご負担いただきますようお願いいたします。なお、これによる経費の節約は約2万円になる予定でございます。何卒ご協力のほどお願いいたします。

3) 事務の電子化について

今後、学会からの情報提供は、ホームページ（<http://jsss.jp>）からの発信に切り替えてまいります。（詳しくは、「ホームページ委員会からのお知らせ」をご覧ください）。会報：理事会報告にもありますが、ペーパーによる会報は今回（35号）と次回（36号）で終了し、37号からはホームページ上のPDFで会報をご覧ください。

メールマガジン：ホームページのアップや緊急の情報については、メールで皆さん

にお伝えいたします。メールアドレスの登録がお済でない方は至急、上記のアドレスまでご連絡ください。

4) 入会手続きについて

入会の希望者は、上記の事務局までメールをいただければ、折り返し、申し込み用紙のファイルを添付してお送りします。必要事項を記入の上、ご返信いただき、会費を振り込んでいただければ、手続きをさせていただきます。

会員動向

住所・所属変更

氏名	住所	所属
岡本 浄実	〒440 0853 愛知県豊橋市佐藤町5丁目7 17 ホワイトアゼリア502号室	
小椋 博	〒761 0113 香川県高松市屋島西町1992 1 1305	
北森 義明	〒188 0012 東京都田無市南町3 20 9	
岡田千あき	〒562 0032 大阪府箕面市小野原西1 2 13 605	
山本 敦久	〒175 0092 東京都板橋区赤塚3 37 16 サンハイツ403	
橋本 政晴	〒179 0084 東京都練馬区氷川台2 18 206	〒112 8681 東京都文京区目白台1 8 1 日本女子大学 体育研究室

長屋 昭義	〒673 8588	
	兵庫県明石市天文町2丁目1-23	
山本 拓司	〒167 0032	
	東京都杉並区天沼3-27-3-202	
山本 存	〒661 0033	〒658 0001
	兵庫県尼崎市南武庫之荘3-12-1-104	兵庫県神戸市東灘区森北町6-2-2 甲南女子大学
大束 貢生		〒603 8301
		京都市北区紫野北花ノ坊町96 仏教大学社会学部
辻 泉	〒790 0833	〒790 8578
	愛媛県松山市祝谷4-1-23 サンハイツゆづき203	愛媛県松山市文京町4-2 松山大学人文学部社会学科
中山 健	〒470 0393	中京大学体育研究所
	愛知県豊田市貝津町床立101 中京大学体育研究所	
挾本 佳代		〒180 8633
		武蔵野市吉祥寺北町3-3-1 成蹊大学経済学部
海老島 均	〒520 0503	びわこ成蹊スポーツ大学
	滋賀県滋賀郡志賀町大字北比良尾所 1403番地 びわこ成蹊スポーツ大学	

菊 幸一	〒203 0011	〒112 0012
	東京都東久留米市大門町2 2	東京都文京区大塚3 29 1
	17 406	筑波大学

リー・トンプソン	〒359 1192	早稲田大学スポーツ科学部
	埼玉県所沢市三ヶ島2 579 15	
	早稲田大学スポーツ科学部	

秋本 信孝 千葉県立松戸六実高校

新納 昭洋 岡山市立旭東小学校

新 入 会 員

氏 名	住 所	所 属
太田 雅夫	〒632 0071 奈良県天理市田井庄町80天理大学	天理大学
山本恵弥里	〒182 0033 東京都調布市富士見町2 8 6	東海大学大学院
山領 亨	〒733 0012 広島県広島市西区中広町3 3 14 201	広島市立大学大学院
于 英	〒733 0025 広島県広島市西区小内町二丁目12 2 305	広島市立大学大学院
岡田 正	〒654 0141 神戸市須磨区竜ガ台1 1 2 23 403	大阪大学大学院

安田 洋章	〒704 8116	岡山県岡山市西大寺中3 17 41	岡山大学大学院
鹿角佐知子	〒120 0032	東京都足立区千住柳町28 2	日本体育大学女子短期大学
北野 英人	〒158 0085	東京都世田谷区深沢7 1 1 日本体育大学社会学研究室	日本体育大学
島田 佳奈	〒158 0085	東京都世田谷区深沢7 1 1 日本体育大学体育研究室	日本体育大学
橋爪 淳	〒158 0085	東京都世田谷区深沢7 1 1 日本体育大学女子短期大学体育科	日本体育大学女子短期大学
松野 将宏	〒981 3212	宮城県仙台市泉区長命ヶ丘6 1 15	東北大学大学院
中村 綾	〒602 8334	京都市上京区西今出川町411 306	立命館大学大学院
門間由記子	〒980 8576	宮城県仙台市青葉区川内東北大学文学部 行動科学研究室	東北大学大学院
五十嵐慎哉	〒651 8585	兵庫県神戸市中央区脇浜町2丁目10番26号	スポーツコミュニティ・ アンド・インテリジェンス

機構

大 達雄 〒700 0011
岡山県岡山市学南町2 7 32
ギルダークート3号
岡山大学大学院

荒川 和民 〒455 0077
愛知県名古屋市港区小割通6 6
ライオンズマンション武道館前204
社会福祉法人みなと福祉会

関 幸生 〒151 0066
東京都渋谷区西原2 29 1
日本陸上競技連盟

長真 樹子 〒658 0032
神戸市東灘区向陽町中5丁目1 524
704
関西大学社会学研究科

退 会 者

枅瀧 俊子
藤原 健固
清野 正義
糸野 豊

住所不明者（ご承知の方は事務局までご連絡ください）

松本 耕二 安永 智和 重村 敦司 河北健太郎 清水 一巳
清和 洋子 田端 教恵 江口 潤 武重 雅文 亀山 有希
瀬尾 恭子 浅川 重俊 中川 俊子 小玉 克哉 鄭 守皓
松村 雅代 伊藤 嘉樹 湯川 照代

編集後記

最近、テニスを再開。院生とシングルスをガチンコと1セットほどするのですが、さすがにキツイ。スプレー式沈静消炎剤、ストレッチ体操、スポーツ・ドリンクに詳しくなりました。

本号をもちまして、2年間の『会報』の編集担当はお役ご免です。かなりキワドイ作業でしたが、何とか役目は果たしたのではないかと考えています。原稿を引き受けてくださった下さった方々を始め、多くの人たちの協力でここまで来ることができました。多謝。 (Hi Jimmy)

学会への連絡、入退会、住所・所属・メール等の変更、会費納入、その他の各種手続き

〒612 8522 京都市伏見区深草藤森1 京都教育大学気付

日本スポーツ社会学会事務局 杉本厚夫【事務局長】

TEL: 075 644 8283 FAX: 075 645 1734

E-mail: secretary@jsss.jp

(郵便口座番号) 00390 0 43962

(加入者名) 日本スポーツ社会学会事務局

会報への投稿等

〒630 8528 奈良市高畑町

奈良教育大学

高橋豪仁【会報担当】

E-mail: doc@jsss.jp

学会公式ホームページ

日本スポーツ社会学会公式ホームページ

<http://jsss.jp>